

家庭をモデルとした児童福祉施設の教育的精神について

金 築 忠 雄 (教職研究室)

Tadao KANETSUKU

The Educational Spirit
of Family-typed Institutes
for Childwelfare

1

わが国の児童福祉施設^{註1}は、保育に欠ける児童に対し、家庭にかわってその役割を果すことが期待されている。従って、その形式や精神を一般家庭に模することが多いようである。施設ではないが、わが国の里親制度の如きは典型的な例であろう。小舎制度^{註2}(cottage system)や family group home^{註3} system といった制度はいずれも同様なことをねらっている。これらの施設の悲願的であるはずの家庭は一体どのようなものとして描かれているか。模すべき理想的な家庭はどのような性格・構造をもっていたらいいのか。また理想的な在り方を問う前に、歴史的社会的制約をうけた現実の家庭がいかにあるかを問わねばならぬであろう。前者については、家庭教育学ともいうべきものが、後者に関しては、家族社会学が答えるはずである。普通の家庭を模そうという意図をもっている施設のことを念頭におきながら、家族社会学によって歴史的社会的な現実としての家庭をみ、のちにありべき姿の家庭の施設教育を求めよう。

2

家族は大家族から小家族へとその形態が移行しつつある。マードック^{註4}は夫婦と未婚の子女からなる小家族を、核的家族 (nuclear family) といい、その複合体として複合家族 (composite family) と対立させている。彼によれば近代的な家族は核的家族である。わが国現代の家族については、川島武宜氏^{註5}は、封建的儒教的家族と民衆的 庶民的家族とに類別されている。山村賢明氏^{註6}は川島理論から出発し、二類型の外に現代小家族の類型を設け、儒教的家族、民族的家族との三類型として捉えようとしている。しばらく山村氏の試論に従って、施設がモデルとし得る家族が、どの類型に属するかを考察してみよう。

家長を頂点とし、成員が家族集団の中に埋没するヒエラルヒーの儒教的家族が、施設に類似する点があるとすれば、いずれも多くは大世帯であることだろう。しかし幾世代もが同居する儒教的家

族、それに特徴的な儀礼主義・形式主義は、近代の人間の形成を期する施設の範とするわけにいかない。それと反対の極に想定された現代小家族はモデルになるだろうか。山村氏によれば、現代小家族とは「物の生産者を組織づけ、その人間関係を調整し、生産物が消費者の手に渡るまでの過程に参与する人間やシンボルを対象とする職業」にたずさわるホワイトカラー層、団地家族において典型的に認められもので、一般に目的合理的行動様式がとられ、家族の外での人間関係において匿名性、非人格性が大となるのと対照的に、家族内部においては、親密性・人格性が高められ、個々人の自律性が家族関係の基本原理になるという。このような家族をとりまく社会は、分業の細分化、機械化、画一化による個人の疎外感を脱れず、生活水準の向上、余暇の増大とともに労働は余暇のために耐え忍ばねばならぬ手段となり、消費は美德であり、余暇の享受が主な生活目標となると説かれている。このような夫婦を中心とした現代小家族では子供の入りこむ余地は殆んど与えられない。施設が児童福祉を目的とする限り、このような類型の家族をモデルとするわけにはいかない。第三の類型、民族的家族に拠る外はない。それでは民族的家族はどんな性格をもち、いかなる運命をたどろうとしているのであろうか。

民族的家族は、生産上の必要から、地域社会において協力関係を維持しなければならず、家族としての機能をなお可成り残している。儒教家族ほどに家長に依存せず、家長の権威はその能力に基づく合理的権威である。主婦の位置も生産と消費に重要な役割を果すから、男尊女卑の観念は成立しない。親子中心の生活ではあるが、夫婦中心への可能性をもっている。この家族のモラルは勤労と耐乏のモラルであり、伝統的な行動様式が支配的である。ここでも全体としての家族集団に対する個人の献身が認められなくはないが、儒教的家族の場合と異り、家族成員の自己主張が認められ、自己主張が家族集団そのものの存続を危くする場合に限って個の埋没が要求される。家長中心でも夫婦中心でもない親子中心の民族的家族こそ施設がモデルとなし得る家族のようである。そこではマードックが指摘したような核的家族の機能——性的 (sexual)、経済的 (economic)、生殖的 (reproductive)、教育的 (educational)——はなお残されており、ペスタロッチーが実践を通して体得し、^{註7} V. E. Frankl が理論的に明らかにしているような人格の深層部に影響を与え得る場所のように思える。そこで、核的家族 (nuclear family) について少しく考察してみたい。

3

家族生活を成立させる要件をまず考えてみよう。中国では、^{註8} 家族は同居すなわち家を共同にして生活することと同義であるという。住居の共同が家族生活にとって必須要件であることは西洋でも同様である。ギリシャ語の家 (oikos) は家族を意味しており、family, Familie, famille の語源であるラテン語, familia は奴隸又は財産を意味し、家父長の支配と所有下にある一切のものを総称する言葉であるという。ドイツ語で Familie を使いはじめたのは十八世紀初頭で、それ以前は Haus (家) が使われ、十八世紀以後 Haus と Familie を同義に使用したとのことである。このように家族と家とは不可分離であり、一つ家での同居こそ、家族生活の第一要件であることを物語るものである。さらに、中国では、同居は当然同財又は共財もしくは同爨を予想していた。財産を共同に

し、食事を共にすることである。このような家族の在り方は、中国のみでなく、他の民族の家共同体にも認められる。居・食・財を共同にする生活とは、人間の最も基本的で自然な欲望をみたく日常的なことを共同にする生活である。親しみもそのような日常性の中から生れてくる。

家族が具備すべき最小の条件が以上のように、居・食・財の共同であるとするならば、それらを共同にしている施設は家族としての最小限度の条件を具えているわけである。これに反し、居・食・財を共同にせず、日常的つながりをもたず、親しみのない生活をしている施設は家族的であるとはいえない。

さて、しかし、「^{註9}家に限定せられた親族の日常生活共同体」が家族であるとするならば、ただ日常的な居・食・財の共同生活というだけでは家族生活そのものにはなり得ないのは言うまでもない。親族の共同生活でなくてはならぬということから、施設の家族的生活が一つの作りごと（fiction）になるのである。そこでこの家族を家族たらしめる自然的条件がどのような意味を有つかを考えてみよう。

4

家族は、生物学的自然に基盤を有つ社会集団である。家族関係の中心をなす夫婦の関係を考えてみると、夫婦は性的生活を営み、子を産み、それを養育する組織であり、経済的協働も行う。しかし夫婦の持続的共同を必然ならしめるものは性的本能のみではなく、むしろ相互の^{註10}習熟による非合理的な相互肯定であるといわれる。このような夫婦間に自ら秩序が生れる。家族の機能が縮小し、家族統制の必要が小になるに従って妻の地位は向上し、夫婦は人格として相互に対するようになる。教育の機会均等、政治上の権利の獲得、財産の所有、個人主義思想の普及と道徳感情の向上、一夫一婦制の確立が、婦人を一層人格として認めるといふ新秩序の樹立に貢献したことはいうまでもない。

夫婦の自然な日常生活、その習熟に基く非合理的な相互肯定、確固たる社会力としての夫婦愛、文化の中で育てられた新しい秩序、新しい秩序の中での相互協力、こういった現実身近に接することは、親族としてではないが、広く深い人間性の地平に於てつながることとなり、施設に生活する子供達を、文化の基底に接せしめることになるであろう。しかし施設の立場からは、家族関係のうち特に重大な意義をもつのは親子関係であろう。

夫婦の愛が強められるのは、子に対する共同の配慮によってである。親子の愛情によって夫婦の愛は発展する。母性愛は母子間の肉体的繋がりに出発しており、幼児が肉体的に母を要求するように、母も又肉体的に子を要求している。母性本能は無力な子を抱擁し接触することによってめざめ、自己の分身であるという事実とそれの確信によって母性愛は強められ、長期にわたる無力な子供の養育によって深められる。母性愛はしばしば普遍的精神的な愛として語られることがあるが、それは本来最も個別的自然的な愛である。その故にかえっていよいよ普遍的精神的でありうるであろう。

父性愛は母性愛ほどに直接的・生物学的ではない。しかし、やはり子の中に自己を見るのであって、子との一体感をもつから、母性愛に劣らず強くも深くもあるといえるであろう。ただ父性愛は、自己の期待にこたえる程度に応じて愛するといった傾向があり、母性愛が無条件であるのに対し、多少条件付の愛のようである。母親が本能的に身につけているアガペの徳を、父親は理性によって否定を媒介して獲得しなければならない。

親の子に対する献身は、親に権威を与えることとなる。auctoritas（権威）とは、auctor（生む者）より転じた言葉だとすれば、親こそ文字通り権威ある存在であると言えよう。権威ある者への悦服が正常な親子関係の在り方である。父親の権威は、歴史的社会的条件によって母に優る権威と認められるに至るが、これがさらに拡大され、すぐれた個人に対する尊敬の念、社会集団や制度の権威の尊重といった社会的秩序の源泉ともなり、人為的に権威を維持強調するとき威厳（^{註11}dignity）が生ずるという。儒教的家族における家長が、威厳をもつことを要求されたのは尤なことである。核的家族においては、上述のような自然な権威に対する自発的な服従の関係があり、親が子に優越する力を失い従前の意味で権威をもつことができなくなってからは信頼と友情の関係が親子間を結ぶ絆となる。

親は子のためにあるが子は親のためにあるのではないという鉄則は、生物である限り人間についても通用するであろう。したがって、子の信頼と友情は親の愛の深さに比すればとるにたらぬものかも知れない。しかし、この関係こそいかにも人間的な関係であるというべきである。子の親に対する信頼と友情とは、親の養育の恩恵に報いるためのものではない自然の情であり、義務の感じを伴うものでもない。親の側では与えた恩恵を返してもらい権利があるといったものではない。このような、相互的な信愛の親子関係こそ家族生活のバックボーンをなすものであろう。

このような親子関係を擬制的に成立させ、それを特に幼い者の人格形成の起点にしようと着眼することは、まことに当然のことである。しかし、このような親子関係が人格形成上、決定的な重要性をもっているだけに、もしも最も核心をなす本質的なものを缺いで形骸のみを模倣するとすれば、最も悪質なホスピタリズムが結果することは必定と思われる。恐らく、正常な家庭生活を体験した者にとっては、帰らぬ過去への郷愁を誘うだけの、また異常環境の中に育ち、まともな家庭生活を体験したことのない者にとっては反感と嫉妬をよびます理解しがたい人間関係として、彼にとって無縁と感じられることとなろう。このような危険を冒してもなお擬制家族によって人格形成を試み、しかもそれが大きな成果をもたらし得るのは何故であろうか。答は簡単であろう。人間はただに自然的存在ではなく、心理的・精神的存在であり、親子の信愛関係を無限に普遍的になし得るということに由来すると考えられる。人類教育の聖者ペスタロッチーは身をもってこの事を証明したものと言えよう。ノイホーフの貧民学校の体験から生れた「隠者の夕暮」(Abendstunde eines Einsiedlers, 1779)、スタンツにおける孤児院経営の中から生れた「スタンツ便り」(Brief an einen Freund über seinen Aufenthalt in Stanz, 1779)をそのような角度から見直すとき、人間形成の可能性について新たな希望を与えられるとともに、安易な道ではないことを痛感させられるのである。

5

ペスタロッターは「隠者の夕暮」の中でこう言っている。「人類の家庭的^{註12}関係は最初のかつまた最も優れた自然の関係である。」「如何に人類の幾世代^{註13}が彼等の家庭的関係の純粋な浄福から離れて、徒らに彼等の知識を閃かしたり、彼等の名誉心をくすぐったりするために、到るところで荒んだ、人を眩惑するような舞台に押し寄せるかを。」手近なところ、身近な家庭の中に自然の道があり、そこからあらゆる善きもの美しいものが生れ、真理への導きをそこに認めねばならないという。乳呑子は母の自然な営みのうちに、愛の何たるかを感じとり、感謝の心を育てる。父親の与えるパンを食べ、共に囲爐裏で身を暖めている間に何が幸福かを知る。ペスタロッターの「自然の道」とは無理も圧迫もまた弛緩もない家庭生活に外ならぬ。いわば日常生活そのものである。このような家庭的浄福を静かに味得するためにこそ、人々は自己の職業にも励み、また公民制度の重荷にも耐えるものであるという。このような無理のない自然な浄福は、楽しい悦楽 (der Genuss) であり、感覚的^{註14}自然を素材とするものである。家庭生活がこのような原始的自然に基盤をもつが故に、力強い人間形成の場になると考える。だがしかしペスタロッターの立場はここにとどまらない。^{註15}「人間よ、汝の家も、またその家の最も賢明な悦楽も、必ずしも汝に安らぎを与えるとは限らない。」といい、「神に対する信仰は総ての知慧と総ての浄福との源泉でもあれば、また人類の純粋の陶冶に到る自然の道でもある。」という。すなわち母と自然と神とが「即」の関係でつながるのである。ただしかし、彼の神は無邪気な子心によって認められるので、むづかしい形而上学や知育の結果知りうるようなものではない。「神に対する信仰よ、汝は陶冶された知慧の結果や結論ではない。汝は単純性の純粋な感じであり、神という自然の呼び声に耳傾ける無邪気な耳である」「神に対する信仰は人間の本性の最も高い関係における人間感情の情調であり、神の親心に対する人類の信頼する子心である。」

このような家庭観をもって、スタンツの孤児院で自らを試みたペスタロッターにおいて、ホスピタリズムが問題になったであろうか。孤児院は1798年12月5日から1799年6月9日までの凡そ半年の間の体験であるから、そのような短期間ではホスピタリズムの実験にはならぬという人があるかもしれない。それにはこう答えることができよう。ペスタロッター精神による実験はひきつづき今日も行なわれており、今後も続けられるであろう悲願をこめた実験であったと。

スタンツ孤児院はその最も盛んなときは収容児童数80名にも及んだ。ペスタロッターを理解できず、子供をあづけることを愚恵を与えることのように考えていた親もいたし、子供をつれて逃亡する者もいた。しかし、あづけられた子供たちは幸福であり「生家におるよりいい」といい、次第に愛着と心酔を示すようになり、なかには非凡な熱心さを学習に示すものも出てきた。しかし、児童の粗野、全児童の無秩序は、彼の超人的な努力にもかかわらず取り去ることがなかなか困難であった。そのような事態に対しても、彼は、規則や規定を説くことによってでなく、彼等の内的なもの、正しい道徳的情調をめざまし鼓舞する^{註17}という迂路を通った。「私の本質的な見地は何よりもまず次の

如くであった。即ち子供は彼等が同居し始めた時の最初の感情に依って、而も彼等の能力を發展させる最初から兄弟姉妹にならせ、学校は大きな家庭の単純な精神に融合させ、そしてそのような関係から出て来る気分を土台として正しい道徳的感情を一般的に生き生きとさせるということである。」家庭関係の全生活の上に建設されていないような学校教育は、人類を徒らに人為的に萎縮させるだけであり、学校教育は家庭教育を模倣することによってのみ人類に貢献しようというのがペスタロッチーの確信であった。放縦な乞食の子が、兄弟姉妹の小家庭でさえ滅多に見られぬような平和と愛と懇懇と誠実とをもって暮すようになる方法の原理は、無理のない自然の道、家庭のやり方をとることだったのである。子供を寛大にあつかい、彼等の日々の要求を満させることによって彼等の感情・経験・行為に即した愛と慈悲を理解させ、かくして諸徳を彼等の内心に基礎づけ、確実にしていくという教育の本道を進むほかいかなる近道もないと信じていたのである。空々しい言葉を用いず、形式的な流行の訓育法も排し、組織的訓育法の如きも問題とせず、絶対的な寛容と慈愛をもって、すなわち親心をもって「不揃いな乞食の子の混った、頑固な悪癖をもった子」を遇する日々は全く超人的であった。「私は彼等と共に泣き、彼等と共に笑った。彼等は世界も忘れ、シュタンツも忘れて、私と共におり、私は彼等と共にいた。彼等の食べ物は私の食べ物であり、彼等の飲み物であった。私は何ものも有たなかった。私は私の周囲に家庭も有たず、友もなく召使もなくただ彼等だけを有っていた。彼等が達者な時も私は彼等の中にいたが、彼等が病気の時も私は彼等の傍にいた。私は彼等の真中に入って寝た。夜は私が一番後で床に就き、朝は一番早く起きた。私は彼等の寝つくまで床の中で彼等と共に祈ったり教えたりしたが、彼等はそうして貰いたかった。終始一貫病気伝染のひどい危険に曝されながら、私は彼等の着物や身体のだんどどうすることもできない不潔を見てやった。」とその超人的な生活を語っている。Frankl が人間は身体的 (somatic)、心理的 (mental)、精神的 (spiritual) の三つの面をもって生きているものと述べているが、ペスタロッチーはその真相を鋭く見抜いている。まず somatic な段階の配慮に出発し、単純と無邪気な雰囲気の中で、mental な欲求不満を解き、愛と慈愛、最高の徳と神への信仰という spiritual な指導に及ぶ。彼は今日の考え方でいえば、すぐれた心理分析学者であり、心理療法の大家であったばかりでなく、すぐれた logotherapist であったといえよう。彼は空しい言葉のやりとり、「人を惹きつける興味もなく、何等の応用もできないような真理についての声や音や言葉」を軽蔑したけれど、子供達との一体感 (rapport) があるときには、子供達が言葉の全部を理解できるかどうかにお構いなく、熱意をこめて条理を説きまかせた。彼はそれによって、何か子供達に印象深満いものを与えたように思うと述べている。子供達との一体感の感ぜられるとき、彼はすぐれた logotherapist となったのである。Frankl は、生き甲斐 (will-to-meaning) を感じなくなることを実存的欲求不満 (existential frustration) の徴候であると述べているが、単純で無邪気な親心子心を通じて神の絶対に包摂される浄福に生き甲斐を感じさせることがペスタロッチーの窮局の目標であり、それが実現できそうな場においては彼は遠慮なくロゴスを駆使したのである。七十人以上もの孤児を容し、集団としての秩序が維持し難いときに発した叫びでもあろうか、次のようなロゴスを子供達に投げかけたこともあった。「お前たちには自分の生家では何時もお前たちを見守ってくれる人が

いた。それは自分の生家では人数が少なかったから、容易にお前たちを見守ることの出来る誰かがいたのだ。而もその時は困窮と貧困そのものが多くの善を生み出した。私たちが喜んで欲したわけではないにせよ、多くの場合、それは私たちを理性に導いてくれた。しかしそれはまた逆でもあるので、若しお前たちが以前生家にいる時困窮から必然に若干の善を行なったように、今度は確信から正義を行なうなら、お前たちは生家にいた時とは違っていくらでも善を行なうことが出来るだろう。若しお前たちが現在も将来も自由意志で幸福をもたらしものを得ようと力めるなら、お前たちは実際、互に七十倍も励まし合い、幸福は七十倍もお前たちの間に現れて来て、活気に満ちるであろう。」と、雑然たる集団の中でこそかえって倍加されなければならない幸福をうたいあげ、説きまかせている。ここにいたって、どこまでも生き甲斐を感じさせようという気魄と熱意には感動するが、子供たちには理解出来そうにないロゴス過剰のようにも見え、ホスピタリズムの可能性を案じさせ、スタンツ孤児院閉鎖の内因にもなりはしなかったかと思うのだが、このような見方は人類教育の聖者に対する冒瀆であろうか。

6

ホスピタリズムは多くの施設に共通な現象のようである。養護施設の児童には、身体・知能・情緒・社会性の発達にかなりの遅滞が認められ、神経症的傾向や対人関係における異常反応が認められる。知能指数も平均77といった程度、道徳的には自発性・自立性に乏しいという。^{註20}自立性はお説教や、たんなる放任でできるのでなく、むしろ依頼心を強めると一見考えられる絶対的依存の体験によって成就され、ただ社会的に適応していける役に立つ便利な人間だということでは、自立の人間であるという保証はないという。絶対依存即絶対自由、二にして一なる愛の体験は生き甲斐を感じること以外ならず、Frankl の existential frustration からの解放を意味している。ペスタロッチーは家庭教育という自然の道によって、神への信仰に導き、絶対依存的体験を通じて生き甲斐を感じてを教えたのである。

愛の具体的表現の仕方はさまざまである。幼い者にはその方法は直接的・具体的でなくてはなるまい。乳児にとっては「なでてやる、あやしてやる、ゆりうごかしてやる、歌ってやる、話しかけてやる。」必要がある。さまざまな表現を通して、被保育者と保育者の間に rapport が成立することを、ペスタロッチーは身を以て示したものと解される。施設に必然的と考えられているホスピタリズムを解く道は合理的科学的処理であるより、むしろ非合理的な rapport の成立であることを教えたとも解される。その点で原始的自然性にその根をもち、単純にして無邪気な自然の道を具体化している家庭は、モデルとするに値する安定した人格形成の場であろう。家族の規模は次第に小さくなり、その機能は縮小したけれど、文化的小世界としての家族の意義は失われることはない。同じ言葉を語り、同じ伝統にしたがい、同じ思惟・行動様式に依存するということとはなくならない。また可塑性・感受性の強い乳幼児に対し、家庭生活のもつ暗示力・模倣力の大きいこともかわることがないであろう。モデルそのものが、はげしい変化をして来ており、抛り処とするのにふさわしくないようにも考えられるが、変りながら変らないという性格をもつ人間性に根ざすべき教

育は、「施設を家庭的に」という原則を、ペスタロッチーと共に繰返し主張することになるであろう。

- 註 1. 児童福祉法第七条参照
- 註 2. cottage system とは同一敷地内に小舎が点在し、小舎毎に親代りの職員がおり、家庭的生活を体験させる。わが国では教護施設に多く見られる。
- 註 3. この制度はイギリスで始められた。7～12名で構成されたホームを、一般地域社会の家庭と共存させ、一般社会からの隔離を防ごうとする。
- 註 4. G. P. Murdock, *Social structure*, 1949, p. 2.
- 註 5. 川島武宜, 日本社会の家族的構成, 1950 日本評論社 p. 3～25
- 註 6. 山村賢明, 近代日本の家族と子どもの社会化, 教育学研究 1961, vol. 28. No. 4.
- 註 7. V. E. Frankl, *The Doctor and the Soul* 1957.
- 註 8. 清水盛光, 家族, 1953, 岩波全書 p. 1～17
- 註 9. 同 上 p. 24
- 註 10. 同 上 p. 203
- 註 11. 同 上 p. 266
- 註 11. ペスタロッチー「隠者の夕暮」59, 長田新訳, 岩波文庫 p. 19
- 註 13. 同 上 71, 文庫 p. 21
- 註 14. 福島政雄著 ペスタロッチーの根本思想研究 1934, p. 106
- 註 15. 「隠者の夕暮」74, 長田新訳岩波文庫 p. 21
- 註 16. 同 上 p. 22. 23
- 註 17. ペスタロッチー・スタンツ便り 32, 岩波文庫 p. 65
- 註 18. 同 上, 岩波 p. 56
- 註 19. Frankl, ditto, Introduction.
- 註 20. 小林治夫, 幼児と施設, 教育と医学 昭 35. 11. p. 935
牛島義友, ホスピタリズムと家庭の機能, 家族関係の心理, 1961 金子書房 p.143—165